

短 報
Note

学校飼育動物の飼育における楽しさと飼育の質に関する検討

土 田 あさみ*

(平成 22 年 8 月 3 日受付/平成 22 年 10 月 22 日受理)

要約：学校教育における動物飼育に対する肯定的な記憶と飼育の質との関係について検討すべく、動物関係科目を受講する大学生を対象に、小学校から高等学校までにおける飼育動物の飼育経験に関する意識調査を行った。調査から、学校で飼育されている動物の種類は主にウサギ（78%）とニワトリ（77%）で、ほぼ同じ割合の飼育率であった。76%の学生が高等学校までの学校で飼育経験を持っており、そのうち92%は飼育が楽しいと回答したが、これは担当教員の熱意と関連性が認められなかった。飼育の質を日誌の作成、餌の計量および動物の名づけに限定して調査したとこと、58%で日誌が作成されておらず、60%で給餌の際に餌が計量されていなかった。また、担当教員の熱意により、餌の計量の有無に差異が認められた。76%で飼育動物に名前がつけられており、そのうちこれら動物の名前を覚えた学生は62%であった。以上のことから、飼育は飼育状況にかかわらず楽しいということが明らかとなり、日誌の作成と餌の計量は学校教育における動物飼育の質を知る指標の一つになると考えられた。

キーワード：学校飼育動物、動物飼育、飼育の楽しさ、飼育の質

緒 言

我が国では明治より小学校で現物示教という理念の下、実学の教材として動物飼育が取り入れられてきた¹⁾。谷田ら²⁾によれば、幼稚園でも少なくとも大正時代から同様に動物飼育が行われてきたとみられる。1997年および1998年に西村³⁾が全国の小学校にメール・アンケート調査を実施した結果では、鳥類あるいは哺乳類の飼育割合は71.2%以上、2000年に谷田ら²⁾が実施した広島県下の幼稚園の動物飼育率は86%、2004年の江戸川区の小学校における動物飼育率は73校中72校⁴⁾、奈良県内の小学校・幼稚園での飼育率は80%⁵⁾であった。動物の飼育は飼育技術の習得という実学的側面のほかに、情操教育という側面がある⁶⁾。初等教育における心の教育という観点からも、週5日制となった今も学校での動物飼育は継続されている。

動物飼育は楽しく教育的にも有効な手段である反面学校飼育動物における問題点が明らかになってきた。特に、動物飼育には休みのない飼育作業という大きな課題がある。週5日制で生じた土日連休における世話のほか、夏期などの長期休暇の世話は学校にとって大きな問題である。また、昨今ではインフルエンザによる学校閉鎖も大きな障害となったであろう。すでに明治の終わりに休日の動物飼育の対応についての指摘がみられ¹⁾、休日の飼育は動物飼育を行っている学校の大きな課題である。教育の場であることから、学校での動物の取扱いは児童の納得の上で進めなければならない、管理のために個体数を調整する作業も簡単

ではない⁷⁾。近年では、これまでの委員会による一部の児童の飼育管理から、飼育を学年の学習科目に位置づけて行ったり⁸⁾、学級飼育として学校全体で飼育に取り組んだりして⁹⁾、飼育環境の改善を図っている。飼育動物の管理をサポートする体制をみると、獣医師会が協力している地域は72.3%あり¹⁰⁾、教育委員会と獣医師会が協働して学校飼育動物の飼育サポートを実施している事例もある^{8,10)}。

以上のように、飼育環境の改善は少しずつなされてきており、これと並行して教育施設における動物飼育の意義あるいは位置づけに関する報告もみられ^{2,8,11-14)}、教育における動物飼育の見直しがなされつつある。

我々伴侶動物学研究室は家庭動物の福祉の向上を目指して活動しており、学校飼育動物を家庭動物に準ずる動物として位置づけている。そのため、学校飼育動物の維持と環境改善のために動物関係の仕事に従事する者ができることを検討し提言していくことは、大学としての一つの社会貢献と考えている。これまでの学校飼育動物に関する報告では、動物とかわる教育面の調査や動物管理衛生に関するもの³⁻⁵⁾であったことから、飼育の基本の見直しについての項目を提言することも、飼育作業内容の充実を図って飼育の質を確保するのに有効ではないかと考えた。提言項目には満足感や楽しさなどの情緒に左右されない判断基準が必要である。本調査は学校での動物飼育に関するものであることから飼育の質を問う項目を最低限の世話ととらえ、給餌に関すること、飼育日誌をつけること、動物の名づけ（個体識別）とした。そしてこれら項目と飼育活動の楽しさ

* 東京農業大学農学部バイオセラピー学科

との関連性について、動物のことを学ぶ学生を対象に調査したので報告する。

調査の方法

1) 調査対象者および調査時期

東京農業大学農学部バイオセラピー学科における1年次の動物関連科目および2年次の動物関連科目を受講した学生を対象とし、1年次は平成21年(2009年)7月、2年次は同年12月において調査を実施した。

2) 調査方法

2年次では授業中に調査書の配布および回収を行い、1年次では授業中に調査書(表1)を配布した後、翌週回収した。調査項目は1) 学校での動物飼育歴の有無と飼育動物種、2) 飼育係になった理由、3) 飼育の楽しさ、4) 飼育動物の名前の有無、5) 記録(飼育日誌)の有無、6) 餌の計量、7) 担当教員の姿勢、等に関するものとし、いずれも選択の回答形式とした。また、飼育の楽しい理由については記述回答とした。なお、問い5)と6)については2年次科目受講生に対してのみ調査した。本調査における「学校飼育」の経験は、小学校から高校までの範囲とした。

3) 調査結果の分析

アンケート結果をいずれも度数として数値化し、これをカイ二乗検定(JavaScript-STAR version 5.5.1j)にて分析を行った。なお、本調査は過去の経験を問うものであることから、「憶えていない」選択項目を設定し、これらの数値も分析に加えた。

結果

1) 調査対象者について

2年次では配布数105、回収数100(回収率95%)、1年次では配布数237、回収数161(68%)で、合計342配布し261の回収(回収率76%)となった。このうち、学校(小学校から高校まで)での飼育経験のあるものは198名で、全体の76%であった(表2)。

表1 質問内容の概要

質問内容		
学校での動物飼育歴	択一式	はい・いいえ・憶えていない
飼育動物種	記述式	
飼育係になった理由	択一式	自分から希望・なんとなく・他になかった・なんでもよかった・クラス/学年制
飼育係の印象	択一式	楽しかった・あまり楽しくなかった・まったく楽しくなかった・憶えていない
楽しかった理由	記述式	
飼育動物の名前はあったか	択一式	はい・いいえ・憶えていない
飼育日誌はあったか	択一式	はい・いいえ・憶えていない
餌の計量を行ったか	択一式	はい・いいえ・憶えていない
担当教員は熱心だったか	択一式	はい・いいえ・憶えていない

本調査において回答した1年次受講生161名中、学校(小学校~高校)に動物がいたと回答したのは155名で、そのうち小学校にいたと回答したのは149名、中学は29名、高校は23名であった。2年次受講生における動物飼育の学校の内訳は不明である。

2) 飼育動物

学校での飼育動物の種類は、ウサギが78%、鳥類が77%とほぼ同じ割合で、モルモットやハムスターなどのげっ歯類が17%、そのほか、犬・牛やヤギなどの反芻獣・爬虫類・両生類・魚類が合わせて61%であった。

3) 飼育係が楽しかった理由

飼育係になった理由では回答した191名中、65%は自分から係になったと回答し、31%はクラス担当制で、残りは「なんとなく」「他になかった」「何でも良かった」の回答を得た。

また、今回の調査では、飼育経験のある学生198名のうち174名(91%)が飼育係は楽しかったと回答した。あまり楽しくなかった、あるいはまったく楽しくなかったと回答したのは6%で、覚えていないは3%であった(表3)。楽しかった主な理由は、「動物とのかかわり(かかわりが好き、一緒に遊ぶ、ふれあい、なつくから)」が44%と最も多く、次いで順に「動物が好きだから」(20%)、「家で飼えない動物だから」(10%)、「かわいいから」(9%)、「餌やりや飼育作業が好き」(9%)であった(図1)。

4) 飼育の質について

飼育動物への名づけに関する質問では、名前をつけていたのが76%、名前をつけなかったが12%であった。また、それら名づけた動物の名前を覚えたかどうかでは、62%がすべてあるいは一部覚えたと回答した(表3)。飼育日誌の存在に関する質問では、24%が飼育日誌があったと回答

表2 調査対象

	配布数	回収数	有効回答数	飼育経験者(人)
1年次	237	161	161	118(73%)
2年次	105	100	100	80(80%)
	342	261	261	198(76%)

表3 質問に対する回答(調査全体)

	はい	いいえ
飼育係は楽しかった	91%	6%
先生は熱心だった	36%	35%
動物に名前があった	76%	12%
動物の名前を覚えた	62%	21%
日誌があった	24%	58%
餌を計量した	28%	60%

し、58%がなかったと回答した。餌を与えるとき計量したかどうかという質問では、28%が計量した、60%がしていないと回答した（表3）

5) 担当教員の熱意との関連性

担当教員の熱意についての回答は、「熱心だった」と回答した者は36%（71名）、「あまり熱心でなかった」、「および熱心でなかった」を回答した者は合わせて35%（62名）であり、29%は覚えていないと回答した（表3）。担当教員の熱意で、熱心だった群（71名）と熱心でなかった群（62名）とで飼育の質について比較検討した結果、飼育系の楽しさ・名前の有無・名前の記憶・日誌の有無については両群に有意な差は認められなかった（表4）。しかし、係になった理由でみた場合、非積極的理由群（なんとなく、他になかった、何でも良かった）では、「自分からなった」群に比べて、熱心だった担当教員の割合が熱心でなかった担当教員の割合よりも少ない傾向がみられた（ $X^2(2)=5.324, 0.05 < p < 0.10$, 図2）。さらに、餌の計量の実施についてみると、熱心だった群では有意に高い割合で餌が計量されていた（表4, 図3）。

考 察

本調査は本大学の学生に実施されたもので、調査対象者の飼育係への意識や係としての記憶に基づいた本調査結果は、学校飼育動物に関する一つの側面を示している。

生き物を扱うことが魅了あると感じる人は少なくない。しかし、生き物の飼育には管理という義務が付随する。動

物飼育の場合、この義務がどのように意識して遂行されるかで、飼育環境は大きく変わる。今回の調査では身近な飼育の基本項目として餌の計量・名前をつけること・日誌の

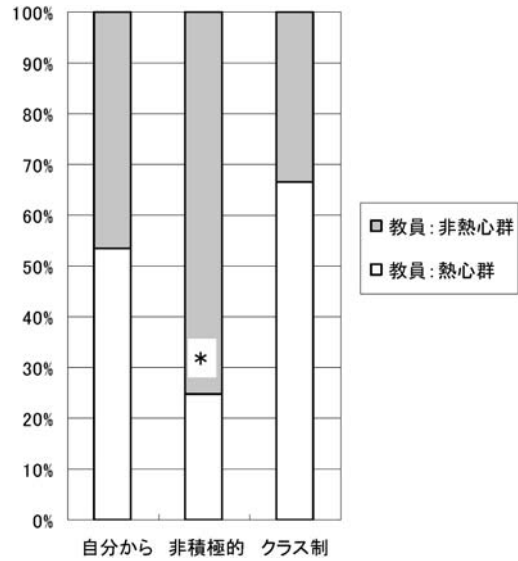


図2 飼育係になった理由と担当教員の熱意の関連性
* : $X^2(2)=5.324, 0.05 < p < 0.10$

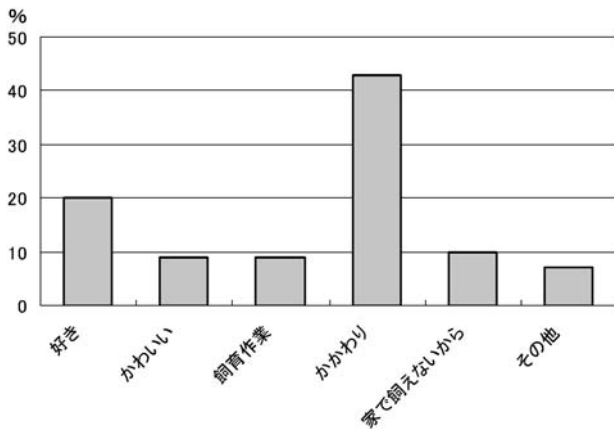


図1 飼育係が楽しかった理由

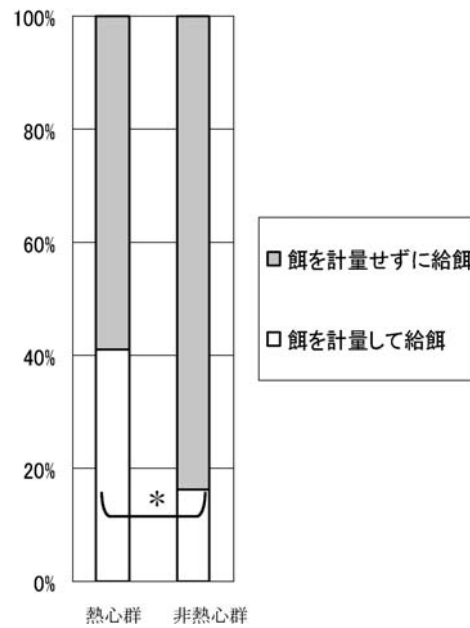


図3 教員の熱意と餌の計量との関係
* : $X^2(1)=5.878, p < 0.05$

表4 教員の熱意と飼育の質との関連性

教員の熱意	係りの積極性*	楽しさ	命名	生徒の個体名記憶	日誌有	餌を計量
熱心						
非熱心	0.05<p<0.1	ns**	ns	ns	ns	p<0.05
(全体)	70%	92%	70%	53%	18%	18%

* : 飼育係になった理由のうち「自分からなった」回答割合

** : 有意差は認められなかった

作成の3点を取り上げた。調査の結果、動物飼育に高い意識を持った集団を母集団にしたにも係わらず、これら項目のいくつかが考慮されていないことが伺われた。すなわち、58%は飼育日誌をつけておらず、60%は与える餌を計量していなかった。家庭での単独での飼育や決まった人が管理する状況とは異なり、教育現場では多くの人が飼育管理に携わる。その場合、動物の健康状態を把握するために記録（日誌）は必須であり、これは医療現場のカルテに相当するものである。また、教育現場での飼育の多くは複数での群飼育が通常で、その場合個体ごとの健康状態の把握は困難であり、したがって餌の減り具合や排泄物の量や質などの観察は不可欠である。常に同じ量を給餌して餌容器におけるかさの把握し、飼育係が減り具合を把握できるようにすることは、単純ではあるが重要な飼育管理のポイントである。西村³⁾の小学校における調査では飼育動物の健康管理で気をつけているのは主に餌や飲水の管理であったが、餌の計量や日誌作成が含まれていたかどうかは明らかでない。記録をつけることは簡単なようで実はなかなか継続が困難な作業である。つけやすい日誌、たとえばチェック方式にするなどの工夫が必要である。

今回の調査ではおよそ2/3で飼育動物に名前がつけられていた。飼育動物種によっては魚類など命名が困難な場合も考えられるが、日誌への記録を考えると何らかの個体識別をしておく必要はある。名前をつける意味は、個体識別というだけでなく、名前を呼ぶことで動物への合図となり、また愛着も湧くと考えられるからである。個体識別を実施するために、個体名やその特徴を記した個体票を掲示するのも飼育の質を高める有効な一つの手段となる（写真1）。家庭での動物飼育と教育現場での複数で飼育する群飼育とでは必ずと管理方法も変わるであろうし、個（人）対個（動物）ではなく個対群とのかかわりになるということを理解しなければならない。

ほとんどの学生が動物飼育は楽しかったと回答し、これは教員の熱意と関わりがみられなかった。楽しい理由として、動物とのふれあいやかかわり等が最も多く挙げられ、幼稚園でのウサギ飼育にも触れ合えることに長所があるととらえることが報告されている²⁾ことから、餌の計量や当番の申し送りがなされなくても、また教員の態度にかかわ

らず、かかわりあえる機会が得られる飼育は楽しめるものであることが明らかとなった。そのことから、日誌の作成と餌の計量は飼育の楽しさに影響されない、飼育の質の指標の一つとなりうると考えられた。また、教員が熱心な方が餌の計量の実施割合が高く、わずかではあるが飼育の質に教員の熱意も影響することが示唆された。しかし、係になった動機が非積極的理由群で教員の熱心さの判定に差異が認められたことから、教員が熱心だったかどうかの判定は生徒の側の意識に影響されていることも否定できない。

動物飼育の質として考えられる項目には、給餌給水などの基本作業はもちろんのこと、衛生管理、健康管理、繁殖管理等が考えられる。動物が飼育されている状況によって飼育の質の内容は変わると考えられる。本報告で述べる飼育の質は、飼育における基本的作業項目を指している。飼育の基本を考えると、飼育の質の捉え方は重要な要素となる。動物の愛護及び管理に関する法律¹⁵⁾では「適正な取扱い」がうたわれており、環境省の家庭動物の飼養及び保管の基準¹⁶⁾では所有の明示・健康及び安全の保持・生活環境の保全・適正な飼養数・繁殖制限などを共通基準として挙げているが、これらは管理基準の枠組みであり、飼育自体の具体策ではない。土田ら¹⁷⁾の学生対象の調査で、動物虐待に関する意識が甘いことが示唆された。すなわち、管理放棄・動物遺棄・不衛生管理などは、わずかではあるが虐待ではないとの認識を持っていることが明らかとなり、動物を飼育したら衛生的に管理し終生飼育することが当たり前にはなっていないということが示唆され、飼育の質のとらえ方に差異のあることが示された。

今後、学校における動物飼育の質を向上させるための提言項目として、今回の調査で取り上げた項目以外にも候補となる項目、たとえば作業のマニュアル化の有無や餌の保存方法等について検討していく余地が残っており、また本報告で取りあげた項目の妥当性について検討していかなければならないだろう。

謝辞：本調査に協力いただきました東京農業大学農学部学生の皆さんに深謝いたします。また、本調査を実施するに当たり、さまざまなヒントを与えていただいた厚木市の小学校の皆様は心よりお礼申し上げます。



写真1 個体票の掲示

参考文献

- 1) 鈴木哲也, 2003, 学校飼育動物小史—明治・大正時代の学校動物飼育, 学校飼育動物と生命尊重の指導 (鳩貝太郎・中川美穂子編), 教育開発研究所, 東京, 68-71.
- 2) 谷田 創, 木場有紀, 2004, 幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性, 日獣会誌, 57, 543-548.
- 3) 西村和彦, 2000, 小学校飼育動物の健康管理に対する指導のための動物飼育に関するアンケート調査, 大阪府大農学術報, 52, 43-46.
- 4) 種市康太郎, 安藤敏孝, 桜井富士朗, 2006, 江戸川区における学校飼育動物の実態について (2) —学校飼育動物の教育的意義と高病原性鳥インフルエンザの影響に関する調査—, どうぶつと人, 13, 3-11.
- 5) 三本隆行, 2005, 奈良県における学校飼育動物の現状, 第20回日本獣医畜産大学学術交流会, 54, 109.

- 6) 無藤 隆, 2003, 子どもの成長と動物飼育. 学校飼育動物と生命尊重の指導 (鳩貝太郎・中川美穂子編), 教育開発研究所, 東京, 10-13.
- 7) 竜田孝則, 2003, 休日や長期休業中の飼育の改善, 学校飼育動物と生命尊重の指導 (鳩貝太郎・中川美穂子編), 教育開発研究所, 東京, 120-123.
- 8) 中川美穂子, 2007, 小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて, お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター-紀要, 4, 53-65.
- 9) 羽田千恵子, 2009, 学校全体での教室内飼育の実践例の発表, 動物飼育と教育, 10, 20-23.
- 10) 日本獣医師会, 2007, 子どもの心を育てる学校での動物飼育 (学校獣医師制の必要性と活動事例), 日本獣医師会小動物臨床部会学校飼育動物委員会報告 (<http://nichiju.lin.go.jp/school/190907.pdf>, 2010.2. 閲覧).
- 11) 谷田 創, 木場有紀, 原田智江, 松島英恵, 望月悦子, 2001, 幼稚園における生き物とのかかわりを通した心を育む教育のためのガイドライン作成をめざして, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 29, 213-220.
- 12) 谷田 創, 木場有紀, 金岡美幸, 原田智江, 池田明子, 松島英恵, 望月悦子, 2002, 幼稚園における生き物とのかかわりを通した心を育む教育のためのガイドライン作成をめざしてⅡ, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 30, 281-288.
- 13) 中嶋真理, 菅原正和, 2006, 中学校における AAE (Animal Assisted Education) の理論と実践 (Ⅰ), 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 5, 101-114.
- 14) 中嶋真理, 菅原正和, 首藤文榮, 2007, 中学校における AAE (Animal Assisted Education) の理論と実践 (Ⅱ), 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 6, 217-229.
- 15) 動物の愛護及び管理に関する法律. ペット六法, 法令編, 第2版, 誠文堂新光社, 東京, 12-27.
- 16) 家庭動物等の飼養及び保管に関する基準. ペット六法, 法令編, 第2版, 誠文堂新光社, 東京, 29-32.
- 17) 土田あさみ, 増田宏司, 2008, 動物を飼育すること—家庭動物飼育に関する意識調査, 東京農業大学農学集報, 53, 253-258.

Investigation about Pleasure and Quality in Caring for Animals Kept in Schools

By

Asami TSUCHIDA*

(Received August 3, 2010/Accepted October 22, 2010)

Summary : In order to investigate the quality of animal management and positive emotion about caring for the animals kept in schools before entering university, we interviewed undergraduate students of Tokyo University of Agriculture about the basic quality of management in caring for the animals, which was defined as naming the animals, measurement of animal-food volume and making an animal care journal to monitor animal management, by using a questionnaire. The results are as follows ; 1) the major animals kept in schools were rabbits (78%) and birds (77%) ; 2) 76% of the subjects had the experience of caring for the animals, and most of them showed pleasure in caring for the animals, although the pleasure was not related to the teacher's enthusiasm ; 3) 58% of the experienced-subjects did not make an animal care journal, and 60% of them did not measure the volume of animal-foods, while the measurement of animal-food volume performed by enthusiastic teachers group was significantly higher than that of non-enthusiastic teachers group ; 4) 76% of the subjects had named the animals and 62% among them actually remembered their names. In conclusion, these results showed that caring for animals kept in schools provided students with pleasure regardless of the quality of the animal management. It was suggested that making an animal care journal and measurement of animal-food volume might provide some benefits to improve the management of care for animals kept in schools.

Key words : Animals kept in schools, animal management, pleasure in caring animals, quality of caring animals kept in schools

* Department of Human and Animal-Plant Relationships, Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture